

外国語で書かれた詩の翻訳を考える

浜田 道雄

This is a pen ではじまった区立中学1年生の英語のテキストは、三年生の最後は Robert Browning の詩で締めくくられた。

The year's at the spring And day's at the morn;
Morning's at seven; The hill-side's dew-pearled.
The lark's on the wing; The snail's on the thorn;
God's in his Heaven - All's right with the world!

英語の先生は「この詩には上田敏の名訳があるんだ」といい、気持ちよさそうにその翻訳された詩を朗読してくれた。

時は春、 日は朝（あした）、 朝は七時（ななとき）、 片岡に露みちて、
揚雲雀なのりいで、 蝸牛枝に這ひ、 神、そらに知ろしめす すべて世は事も無し。

最近沓掛良彦さんのエッセイ集『文酒閑話』にある『外国語の詩を読むということ』を読む機会があった。古代ギリシャ・ラテンの叙情詩を研究する著者は、このエッセイで「母語でない言葉で書かれた詩はどこまで理解できるのか」という問題をとりあげている。

これはなかなか面白い設問である。私のように英語文献をなんとか読むことはできても、その文化の中にどっぷりと浸かった生活経験のない者にとっては、英語の詩を理解することはなかなか難しい。詩に使われている言葉のひとつ一つの意味は理解しても、その語のもつ文化的背景、感性などまで十分理解できるとはとてもいえないのだ。上の詩でも、上田敏の「訳詩」からは様々な情景を思い浮かべ、そこでの感情の動きをみることはできるが、Browning の原詩からは同じような感情を読み取ることは難しい。

とくに詩は言葉の音とリズムが重要な要素なのだが、Browning の詩を読んで、私達はどこまでその韻律の美しさを楽しむことができるだろうか。簡潔な文節からくるリズム感はわかっても、韻を踏む言葉の本当の美しさまで堪能できるかといわれれば、私には自信はないというしかない。

これは漢詩の場合にもいえることである。私達が漢詩を読むときは、「漢文訓読」という先人の練り上げた美しい“翻訳文”を通して鑑賞するのであって、漢語の原音のもつリズム感や韻を踏む音読の美しさを楽しむことはまったくしていない。李白や杜甫がどんな音でどんなリズムで彼らの詩を謳い上げたのか、知りようもないのだ。

明治以来、私達の先輩は欧米のさまざまな文学を翻訳し、それらを通じて近代化を進めてきた。そのおかげでいまでは世界文学の名だたる名作のほとんどは日本語に翻訳されていて、私達は居ながらにしてその文学作品を楽しむことができる。

だが、Browning の詩と上田敏の訳詩を比べてみて思うのだが、「翻訳」という“異文化を私達の言語に移し替える知的作業”の成果を読んで、私達はその異文化の本質にどこまで迫ることができるのかと、しばしば考え込んでしまう。

とはいえ、私にはそんな異文化の本質に迫るだけの語学能力などないのだから、上田敏の名訳をはじめとして先人の訳してくれたさまざまな翻訳文学を黙って読み、鑑賞することで満足すればいいではないかとまた思い返したりもする。